ARCLE®

英語の授業・学習においてどのようにICTを活用していけるか

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム報告書

SYMPOSIUM REPORT **2022**

ベネッセ教育総合研究所

はじめに

第16回上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウムのタイトルは、「英語の授業・学習においてどのようにICTを活用していけるか」になります。

日々の生活においてICTに触れる機会が増え、私たちのコミュニケーションに大きな変化、影響をもたらしています。英語教育においてもコミュニケーションのあり方は変化しており、ヨーロッパ言語共通参照枠CEFR Companion Volumeには「オンライン・インタラクション」の項目が追加され、新しいコミュニケーションスタイルの反映がうかがえます。電子黒板などの新しいICTツールが教室に入り、授業準備は効率化されましたが、授業はどのように変わるのか、あるいは変えないのかを悩まれている先生方も多いと思います。今日はICTの活用にトピックを絞り、第1部では調査報告を受けての討論、第2部では、実践報告と実践研究報告をしていきますので、皆さんが気になっていることに関して何らかを持ち帰っていただければと思っています。

東京外国語大学／ARCLE代表　根岸 雅史

目次

第1部：調査報告・討論

新課程における学校でのICTの活用状況と今後どうあるべきか
— 英語教育から考える —

発表者・登壇者：根岸 雅史（東京外国語大学）／金森 強（文教大学）／和泉 伸一（上智大学）
酒井 英樹（信州大学）／岡部 悟志（ベネッセ教育総合研究所）　ページ 1

第2部：実践報告・実践研究

英語の授業・学習においてどのようにICTを活用していけるか

①実践報告『言語活動を行う中でのICTを活用した実践と資質・能力の育成』
発表者・登壇者：俣野 知里（京都市立二条城北小学校）／酒井 英樹（信州大学）　12

②実践研究『「論理・表現」でICTを活用して書く意欲を高めるには』
発表者・登壇者：工藤 洋路（玉川大学）／津久井 貴之（群馬大学／大妻中学高等学校）／
長沼 君主（東海大学）　19

ARCLE理事からのメッセージ　シンポジウムを終えて　29

参加者の声　「心に残った気づきや学び・これから取り組みたいこと」～参加者アンケートから～　31

※シンポジウム当日の投影資料はARCLEホームページ https://www.arcle.jp/report/2022/0001.html に掲載しています。

第1部：調査報告・討論

新課程における学校での ICTの活用状況と今後どうあるべきか

— 英語教育から考える —

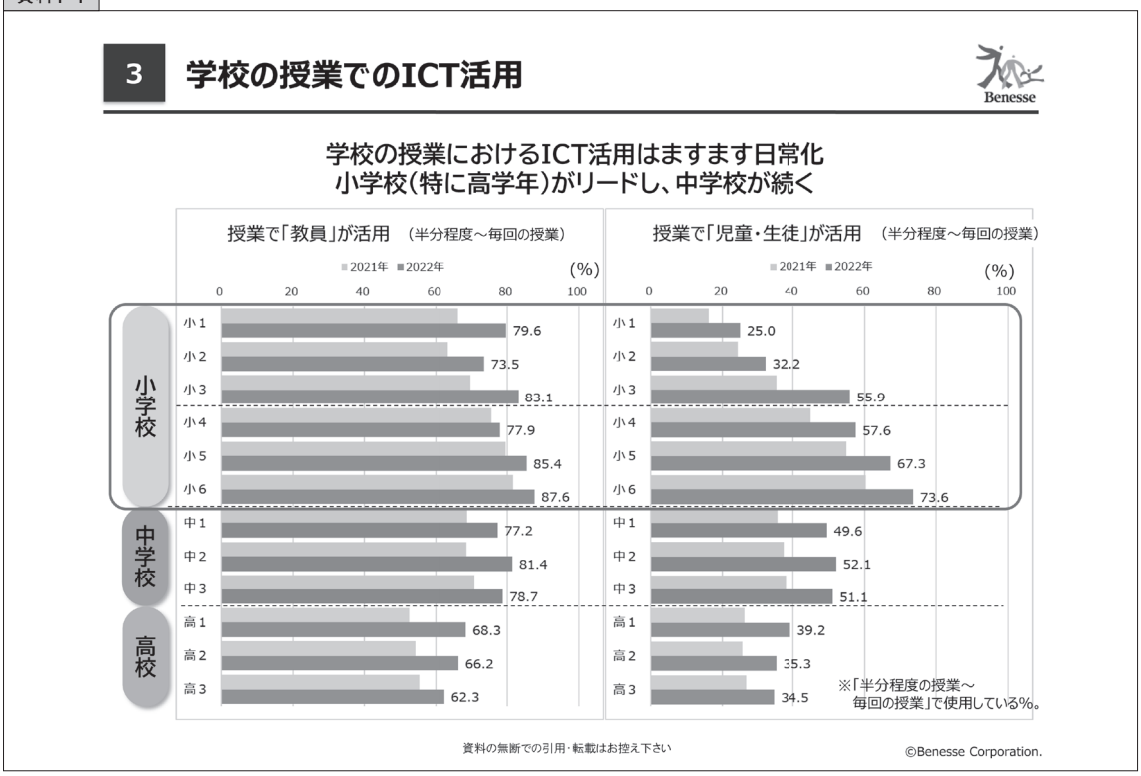
発表者・登壇者：根岸 雅史（東京外国語大学）／金森 強（文教大学）／和泉 伸一（上智大学）
酒井 英樹（信州大学）／岡部 悟志（ベネッセ教育総合研究所）

酒井先生：第1部では、ベネッセ教育総合研究所の「小中高校の学習指導に関する調査2021・2022」から学校でのICTの活用現状を知るとともに、教科別の取り組みの違いにも焦点をあて、英語指導での特徴やみえてきた課題を整理したいと思います。それでは岡部さん、調査報告をお願いします。

岡部：ここで使用した調査データ「小中高校の学習指導に関する調査2021・2022」は、GIGAスクール構想1年目2年目にあたる2021年と2022年に、全国の学校の先生を対象に行った調査です。

授業でのICT活用頻度を表すグラフを見ますと（資料1-1）、7～8割程度の先生が半分以上の授業で「活用している」と答えています。「授業で

資料1-1



岡部 悟志さん

『児童・生徒』が活用」の比率は若干少なくなりますが、小学3年生以上から中学生の5～7割程度が活用しています。高校での活用は、小・中学校に比べて、まだ低めです。その背景として、1人1台端末の整備状況の違いがあるようです。

次は、授業のどのような場面でICTを活用しているかを示したデータです（資料1-2）。2021・2022年とも「インターネットを用いて情報収集を行う」が6～7割台と高くなっています。2021年と2022年の差に着目しますと、「グループや学級全体での発表・話し合いを行う」が大きく増加しています。特に小・中学校では10ポイント以上増加しており、協働的な学びでの活用の増加がうかがえます。

そのような授業での活用シーンの変化を受けて、先生方の効果実感はどのように変わっているのでしょうか。1人1台端末の効果実感を2021年と2022年で比較した結果、小・中学校の先生は、「自分の考えや意見を表現しやすい」や「友だちと協働的な学びがしやすい」等の変化を感じていることが、データからうかがえます（資料1-3）。

次に、1人1台端末を使った指導場面を、一斉指導・協働的な学習・個別指導の3つに分け、どの場面で理想的な状況に近づいているかを尋ねました。一斉指導に関しては、8～9割の先生が実現に近づいていると答え、また、協働的な学習は個別指導よりも絶対値が高く、2021年から10ポイント以上伸びています（資料1-4）。

資料1-2

5 授業でのICT活用

Benesse

「グループや学級全体での発表・話し合いを行う」など協働的な学びでの活用が大きく増加

(%)

	小学校			中学校			高校		
	2021年	2022年	差	2021年	2022年	差	2021年	2022年	差
計算や漢字などの反復的な練習を行う	52.2	63.9	11.7	27.9	33.2	5.3	23.2	25.8	2.6
インターネットを用いて情報収集を行う	74.7	77.1	2.4	71.0	76.4	5.4	65.3	68.6	3.3
写真や動画を撮影して学習に活用する	77.9	84.8	6.9	48.4	55.9	7.5	43.5	47.5	4.0
シミュレーション(動画や３Ｄ映像など)を用いて理解を深める	45.7	48.3	2.6	39.9	45.0	5.1	35.1	38.6	3.5
資料を作成したり、作品を制作したりする	46.5	56.0	9.5	46.5	56.5	10.0	44.4	47.8	3.4
グループでの分担、協働による作品の制作を行う	29.5	39.4	9.9	35.0	46.8	11.8	33.7	36.7	3.0
複数の意見・考えを議論・整理する	40.1	49.8	9.7	47.1	58.2	11.1	35.9	41.7	5.8
グループや学級全体での発表・話し合いを行う	47.8	59.2	11.4	52.1	65.5	13.4	40.1	45.7	5.6
遠隔地や海外の学校の児童などと交流する	6.8	7.5	0.7	5.3	6.1	0.8	8.9	9.2	0.3
学習した成果や考えたプロセスを記録・保管する	44.2	51.5	7.3	33.7	40.8	7.1	38.5	41.5	3.0
習熟度に応じた課題に個別に取り組む	44.3	51.8	7.5	26.2	32.9	6.7	26.8	26.7	-0.1

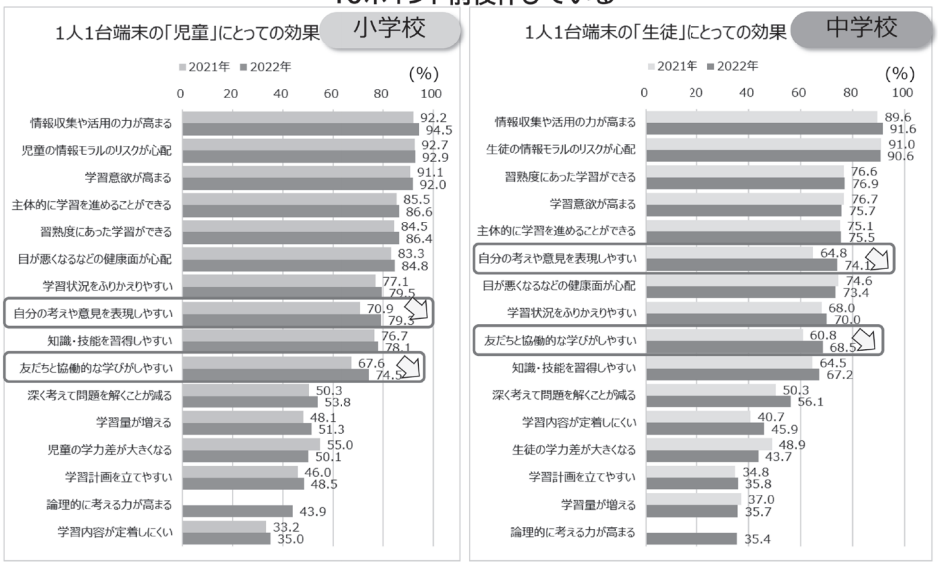
※「よく行っている+ときどき行っている」の％
※2022年と2021年で、10ポイント以上増加しているものを濃い灰色、5ポイント以上増加しているものを薄い灰色で網掛けしている。

資料の無断での引用・転載はお控え下さい
©Benesse Corporation.

資料1-3

6 1人1台端末の子どもにとっての効果

「自分の考えや意見を表現しやすい」「友だちと協働的な学びがしやすい」が
10ポイント前後伸びている

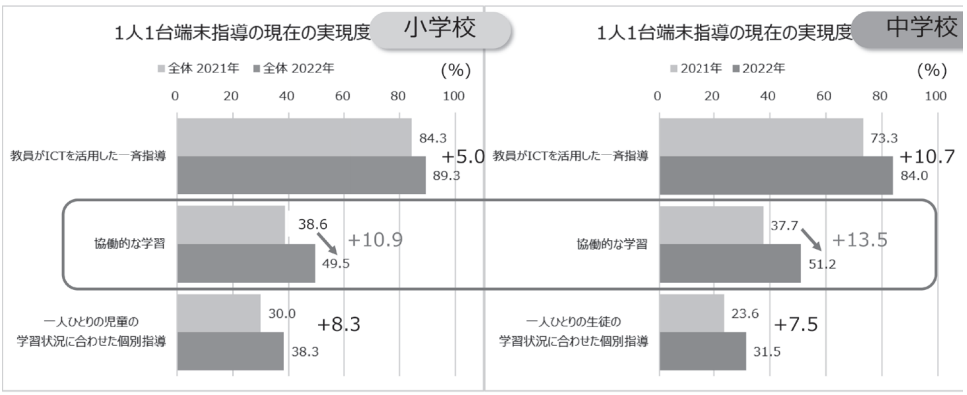


資料の無断での引用・転載はお控え下さい ※「とてもそう思う＋まあそう思う」の%。 ©Benesse Corporation.

資料1-4

7 1人1台による一斉指導、協働学習、個別指導の実現度

「一斉指導」「協働学習」「個別指導」の実現度はいずれも上昇
「協働的な学習」は「個別指導」よりも実現度が高く、変化の幅も大きい



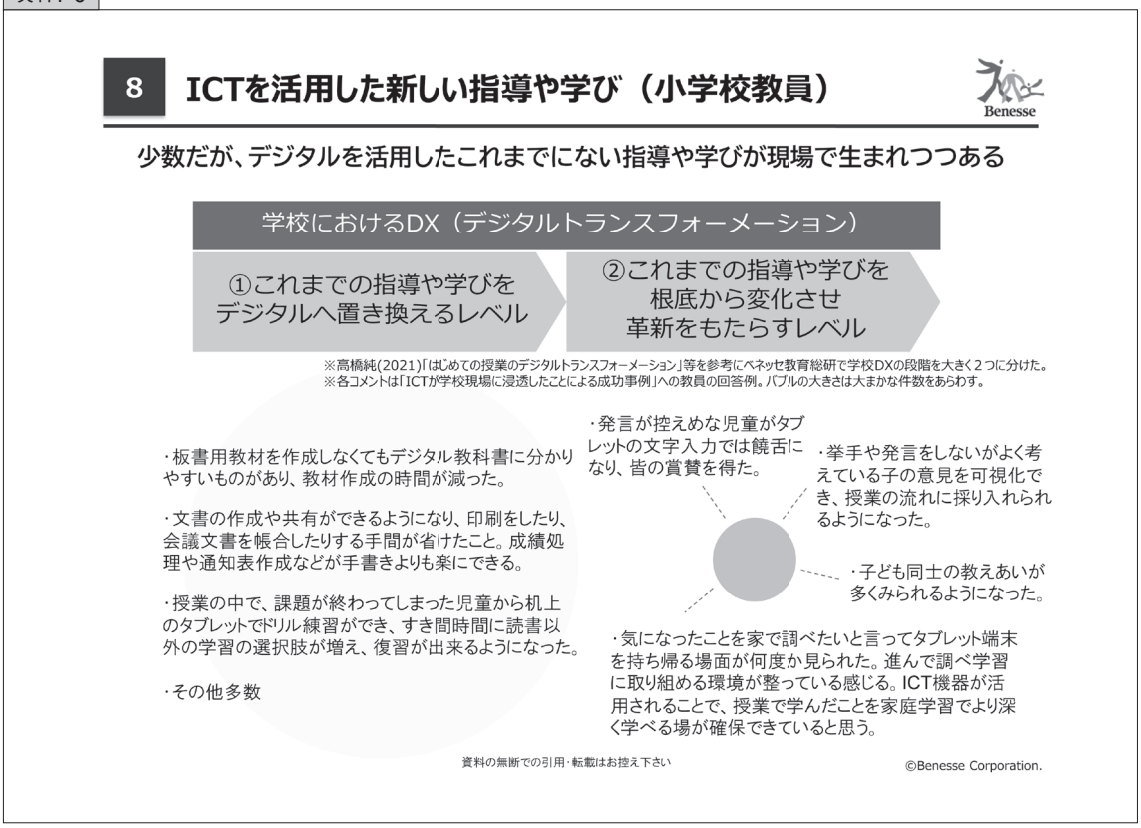
※「かなり実現している＋まあ実現している」の%。

資料の無断での引用・転載はお控え下さい ©Benesse Corporation.

デジタル技術の進展により、暮らしや社会などが質的に変容していくDX（デジタルトランスフォーメーション）が学校教育でも段階的に生じていることも先生方からの自由記述（ICTが学校現場に浸透したことによる成功事例）をベネッセ教育総合研究所が分析した結果からもうかがえます（資料1-5）。ここでは、学校でのDXの段階を「これまでの指導や学びをデジタルへ置き換えるレベル」と「これまでの指導や学びを根底から変化させ革新をもたらすレベル」の2つに分け、それぞれの段階においてICT浸透による学校現場での成功事例を見てみました。全体の8～9割にあたる「これまでの指導や学びをデジタルへ置き換えるレベル」では、「板書用の教材がデジタルに置き換わったので、制作にかける時間が減りました」や「書類の整理などの手間がだいぶ省けました」などの校務の効率化・自動化、あるいは、生徒の学びの選択肢が増えることによる効果を感じていると回答しています。まだ数は少ないですが、「これまでの指導や学びを根底から変化させ革新をもたらすレベル」では、協働的な学びの活性化で、日頃は控えめな子が発言できている様子や、それをみんなで認め合う場が生まれている様子がうかがえる回答がありました。

続いては、英語の先生の回答に焦点をあて、英語指導での特徴や課題・論点を見ていきます。文部科学省によりますと、2024年度から外国語で、先行的に指導者用・学習者用のデジタル教科書を導入していく予定とのことですが、現時点（2022年）においても、他の教科に比べて導入が進んでいます。中学校では指導者用が92.7%、学習者用が74.2%と、浸透率が高めです。次に、英語教員

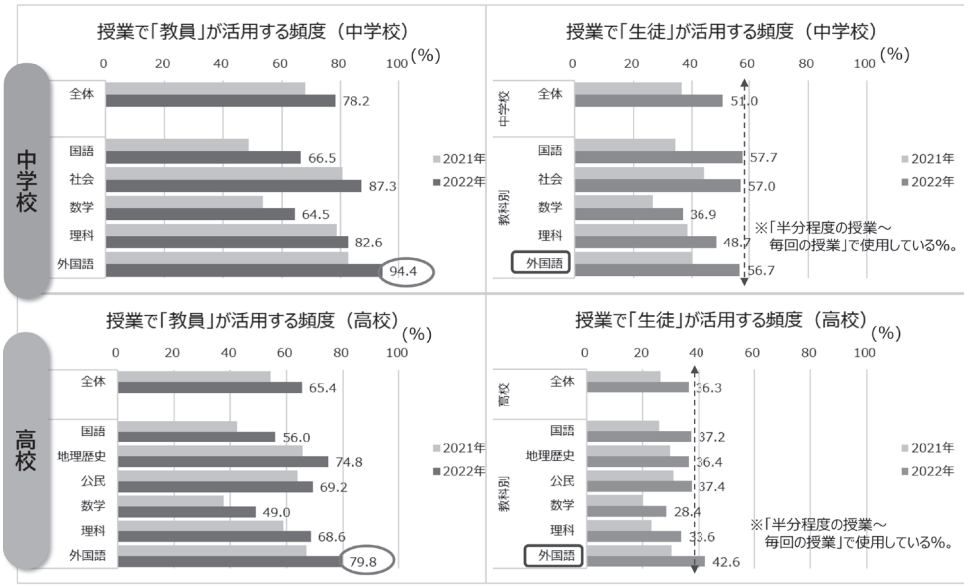
資料1-5



資料1-6

11 英語教員のICT活用と子どもの活用

英語教員の多くは授業で活用しているが、子どもの活用は伸びていない

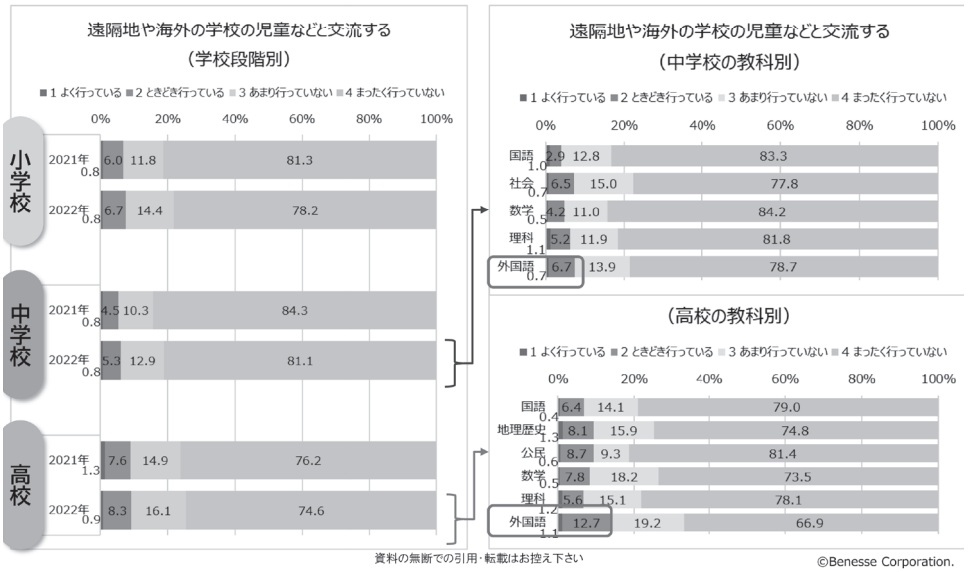


資料の無断での引用・転載はお控え下さい
©Benesse Corporation.

資料1-7

15 遠隔授業

期待されている遠隔授業の実施は少数派



資料の無断での引用・転載はお控え下さい
©Benesse Corporation.

のICT活用と子どもの活用を見てみますと（資料1-6）、中・高の英語教員の8～9割は活用していますが、子どもの活用は伸びていない状況が見て取れます。さらに、中学校教員のICT活用を教科別に見ますと、「インターネットを用いて情報収集を行う」と「グループや学級全体での発表・話し合いを行う」は、どの教科でも多く、共通したICTの活用法のようです。一方、英語での特徴的な活用は、単語の発音やスピーキング練習用に「写真や動画を撮影して学習に活用する」や「英単語などの反復的な練習を行う」でした。

協働的な学びにおける教科別のICT活用を見ると、中学校の国語と社会で「自分の考えや意見を表現しやすい」や「友だちと協働的な学びがしやすい」が、去年から伸びていますが、英語では絶対値は高いものの、目立った伸びは見られません。また英語では、ICTを活用することでこれまでできなかった遠隔授業への期待が高まっているように思われますが、実態は1～2割程度で、実施状況は高くないことがうかがえます（資料1-7）。

最後に、本調査をまとめた資料をご紹介し、私からの調査報告は以上とさせていただきます（資料1-8）。

酒井先生：ありがとうございます。それでは続いて討論に移ります。根岸先生、よろしくお願いします。

資料1-8

16 まとめ

Benesse

1. 学校でのICT活用の現状

（1）授業でのICT活用は日常化。小学校がリードし、中学校が続く。
（2）高校での活用も増えているが、1人1台端末の整備が小中に比べて遅れている。
（3）この1年で、「協働的な学び」におけるICT活用と教員の成果実感に伸び。
（4）少数だが、ICTを活用した新しい指導や学びが生まれつつある。

2. 英語指導での特徴やみえてきた課題・論点

（1）他教科と比べて、デジタル教科書は指導者・学習者とも充実。
（2）教員は活用しているものの、子どもの活用は伸びず。
（3）協働的な学びの全体的な広まりの中で、英語教員の成果実感は高どまり。
（4）ICTを活用した新しい指導や学びの兆しが見られるものの、
期待されている遠隔授業の実施は1割前後にとどまる。

資料の無断での引用・転載はお控え下さい
©Benesse Corporation.

根岸 雅史 先生

根岸先生：討論のテーマは「新課程における学校でのICTの活用状況から、今後どうあるべきか―英語教育から考える―」で、次の3観点を用意しました（資料1-9）。観点aは、現段階で、英語の授業・学習でのICT活用の効果（よい点）はどこにみられているか。観点bは、英語教育における協働的な学びでのICT活用の方法（他教科に共通するもの、しないもの）とは何か、その活用において注意すべきところはどこか。観点cは、ICTの活用は、言語活動として英語でのコミュニケーションを促進しているか、どう促進することができるかです。討論の司会は私が務め、金森先生、和泉先生、酒井先生に7分間程度お話しいただいた後、議論をしていきます。最初は、金森先生にお願いします。

金森先生：最初ですので、大枠から考えたいと思います。ICTには、Cのコミュニケーションが入っていることが重要です。ICTを考える時、調理器具と似ているところがあり、使うことで時短になったり、調理が容易になったりすることで、効率は上がりますが、使用方法等に精通し、使い慣れるまでは、必ずしも同じ味が保証されているわけではありません。結局、教育においては、学習者の学びにおける変容が生まれるかどうかが一番のポイントになります。

ICTの活用により、動画や音声等の情報量は膨大になり、オーセンティックな英語に触れる機会

資料1-9

も増えました。世界と簡単につながれるようになり、ライブでのやり取りや録画したビデオレター等で情報交換や交流をする小学校も多くあります。さらに今後は、AIロボット先生も登場するかもしれません。

タブレットを使用したプレゼンテーション活動等が増えていますが、話し手はタブレット画面の原稿をのぞきながら発話し、聞き手はタブレットのイラストや動画に集中し、発話に耳を傾けて聴くことはなく、画面から情報を得ようとする姿が見受けられたりします。ICTを用いたために、相手を意識しながら話すことや、相手の発話を注意して聞くことが、結果としておろそかになってしまっているのです。

協働的な学びは、情報共有するだけでは十分ではなく、教師が足場かけ（scaffolding）を行い、学習者同士のやり取りの中で、学習者自身が言語材料や文構造を選び、語順やパラグラフ構成を変えるといった再構築する学びこそが重要です。

また、ICTを使用する際は、教室で使用するのか、家庭で使用するのか、グループか、一斉か、個人なのか、それぞれの場面や状況別の効果的な利用を考える必要があります。

育みたい資質・能力の3観点で考えると、知識・技能でのICT活用は進んでいますが、協働的な学びにつながる「思考力・判断力・表現力」、思考の再構築、内容や構成の理解、深い学びが生まれるICT教材の工夫が、今後は必要と言えそうです。

スキルの領域を育てるICT活用はうまくできてきていますが、例えば、高校の論理・表現における批判的思考能力の育成、文章の構成等を振り返る力の育成について、ICTを用いた指導に関する質的・量的なエビデンスで出せるようになると、効果的な指導につながるはずです。紙ベースだった知識・技能の指導が、デジタルベースに移行していますが、今後さらに、現場で実際に使用されながら開発を進めることで、伸ばしたい・育てたい資質・能力に合うICTの使い方を共有していく必要がありますし、即興性の能力が育成されるようなICTの使い方にも期待したいところです。

根岸先生：ありがとうございます。たくさんの論点を挙げていただきましたが、コメントをいただければと思います。

酒井先生：ICT活用が、3観点のうちの知識・技能で特に多いことは課題の1つです。英語の授業で大事な部分、コミュニケーションを確保するICTの活用法を考えていく必要性を感じました。また、オーセンティックな情報が入手しやすくなり、情報を探す機会も増えた生徒が、自分で選び、自分で情報を獲得していける方略的な指導の大事さも感じました。

根岸先生：和泉先生、いかがでしょうか。

和泉先生：ICTにおいて、コミュニケーションが大きなキーワードになるというのは大事だと思いました。特に英語科では、コミュニケーションは生命なので、どのようにこの“調理器具”を使うかは大事です。器具は器具なので、それをどのように使い、どのように提供するか、最終的に喜んでもらうためにできること（つまり、児童・生徒の学びにつなげられるか）を考える必要があります。また、知識・技能での活用が注目されていますが、今は始まりのフェーズで、5年、10年かけてより幅広い活用が広がっていけばよいと思っています。現状として、これまで紙媒体でやっていたことが、デジタル表示できるようになり、効率化が図られたことは、非常に重要です。これからは、この効率化された部分を新しく何に使っていくのかが、議論されるべきだと思います。

AIロボット先生の話がありましたが、今後ロボット先生がいる授業になった時、先生の役割について金森先生はどのようにお考えかをお聞きしたいです。

金森先生：とても重要なポイントです。膨大な量の情報をロボット先生は提供できるのでしょうが、人間先生は、知識や情報を共有するだけでなく、学習者の学びにおいてscaffoldingが起こるようにうまく授業を流し、発問を上手にすることで、学びの協働体に育つような役割をもつことが大切になると考えます。クラスの子どもたちのことをよく知っている教師がもつ役割は大きく、学習ストラテジーを育てるためにも、教室で、一人ひとりの個の能力や才能、長所に気づき、それぞれに応じた指導を意識することが重要だと思っています。

和泉先生：ありがとうございます。

根岸先生：人間の先生が必要でない時代になるのか、いや、人間の先生の価値を信じたいです。次は酒井先生、よろしくお願いします。

酒井先生：ICTの大きな効果は、外の世界とつながりやすくなったことです。様々な言語活動が、リアルになっている印象です。例えば、投稿する場所、つながる相手が見つけやすくなり、言語活動は以前よりも容易になり、つながりもリアルになっています。

また、知識・技能の側面だけでなく、自分のレベルに合った情報を調べる、自分でテーマをもち、情報を得るなど、個別最適化したICT活用でありたいと思っています。

今年受け持ったリスニングを中心とした大学生の授業では、一人ひとりが聞きたいものを聞きました。黙々と聞く時間が中心ですが、分からないところはサポートし、聞いている内容を学生同士が英語で少しやり取りしました。専門的で難しい内容もありましたが、学生の方が詳しく知っているからこそ理解できることもあり、聞く題材を学生自身が選ぶ授業は、中・高でも取り入れることができると思いました。

ICTは、思考力・判断力・表現力に関する指導で、特に効果的な活用ができると思います。聞く活動では、繰り返し聞く、部分を強調して聞く、メモを取る、表に整理することができますし、読む活動では、教科書に丸をつけたり、線を引いたり、関連づけや切り貼り、情報の並べ替え等をしたりすることも可能です。また、取り込んだ画像を共有してやり取りを深めること、意見交換、振り返り、パラグラフ構造を意識した情報整理が、思考ツール等を使い、効果的にできます。これまでプリントで指導していたことが、ICTにより、個々の生徒への指導がしやすくなり、発想が広がり始めています。以上です。

根岸先生：ありがとうございます。金森先生、いかがでしょうか。

金森先生：教材化がしやすくなり、統合的な活動がつくりやすくなると思います。聞くことは大切だと考えていますので、予想しながら聞く、反応しながら聞く、まとめながら聞くなど、様々な「聞く」が起こるワークシート等のThinking Toolができればよいと思っています。生徒が、それぞれのアプローチでリスニングをすることで、個々の能力を上げていける環境をつくれたらと思っています。

ICTの活用法、進め方を考える一方で、ICT活用が進んだ後の学校のあり方は、どのように変わるとお考えですか。

酒井先生：学校のあり方、学校の役割は変わると思います。個別最適化に向かう子どもたちの学ぶ意欲、学ぶ力を育てていくことが、学校が担う部分

として大きくなると思います。学校は、協働的に友だち同士で共有し、対話的に学び、外と協働的に学ぶつなぎ役になると思います。先生同士、子ども同士が、外でもつながれるファシリテーターの役割を先生がすることが、今後は増えると思います。

金森先生：ありがとうございます。

和泉先生：外の世界とのつながりを築く上でICTは非常に重要で、言語活動がリアルになり、ICTがあることで可能性は広がると思います。教育現場では、コピーライトの問題等で使えない題材や表現が多いですが、教育を目的とした生き生きとした英語の活用が、もう少し自由にできるように、声を上げていかなければいけないとも思っています。

根岸先生：酒井先生が紹介されたリスニングの取り組みで、皆が違うもの、好きなものを聞くのは面白いと思いました。各々がもつ違う興味、自分にしか得られない情報を皆と共有したいという気持ちはあるでしょうし、オープンなソースを皆で聞き、アクセスした後に話をするのは面白いと思いました。では最後に、和泉先生、お願いします。

和泉 伸一 先生

和泉先生：皆さん大事なことをおっしゃっていましたが、ICTによる効率化と活用の広がりは、とても大きいです。特に英語科で重要となる音声面はかなり充実してきましたし、絵や写真、動画の視覚情報から、ダイアログの背景、雰囲気、場面の状況が分かるようになってきました。英語教育において、意味、場面、状況の明確化と充実化は非常に重要です。その観点から、語学教育における3つの重要な側面、「形式（form）・意味（meaning）・機能（function）」について話をしたいと思います。これら3つの側面を結びつけて学習することで、コミュニケーションの能力が初めて育つと考えられています。とりわけ、「機能」は、いつ、どこで、何の目的で、何のタスクで言葉を使うかを表しています。これまでの英語教育では「形式」が中心でしたが、ICTの活用によって、音声や映像を簡単に、また頻繁に入れることができるようになりました。その結果、3側面が三角形として密接に結びつけられる状況が生まれつつあります。英語の授業に“生命”を吹き込む手伝いをICTがしてくれていると言えるでしょう。重要なのは、生徒の頭の中で、英語が使われる状況が生き生きと描かれ、そこで文法や単語がどう使われているのかを学ぶことです。インプットを与え、アウトプットをするときも、ただ形式を学び、そのまま再生するのではなく、直面する状況の中で言いたいことをその場面の中で実践することが大切です。

ロボット先生と現在急速に発達しているAIの添削機能は、これから5年、10年の間にさらに進むと予測されます。これまで忙しく追われていたフォームの添削などをAIが手伝った際、人間の先生の役割として一番重要だと私が考えるのは、ミーニングフォーカス・フィードバックです。添削が中心の指導ではなく、生徒がどのようなことについて書いたかに注目し、そこに書かれた内容に対して教師がどのように反応をし、コメントをしていくかです。これはAI添削にはできない、とてもヒューマンな部分です。そこに生徒との豊かな交流が生まれ、それが生徒のやる気につながり、書くことへの、つまりコミュニケーションのうれしさ、楽しさを感じるのです。

根岸先生：では、金森先生いかがでしょう。

金森先生：相手あってのコミュニケーションですので、相手から反応がないのはつらいですね。ロボットが全てを行うことはできないでしょうし、目的、場面、状況があるからこそ、気持ちや内容、理由を

伝えたくなるものです。結びたい人間関係を思いながら言葉を使い、やり取りをするのですから、相手からのフィードバックもとても大切になります。そのフィードバックを与える1人として、教師や友だちがいると思います。その大切さを育てることが教師の醍醐味である気がします。

例えば、レストランで食べるのと同じ料理を宅配で受け取ることができたとしても、部屋で1人で食べるのと、友だちや家族、仲間と一緒に食べるのとでは、違いがあるはずです。さらにレストランの素敵な雰囲気で食べるのとでは、違いがあるはずです。摂取する栄養素は同じでも、感じているものには違いがあります。その時間や空間をどれだけ意味のある素敵なものにすることができるかが、教師の力でもあり、大切にしていく部分であると思いました。

酒井先生：小学校で英語を教える際、正確さや文法的な部分に苦手意識をもたれる先生が多いので、そこをAIがサポートし、先生はもっと中身の部分、やり取りやコメントに時間をかけることができたらよいと思いました。

根岸先生：最後に少しだけお話しします。よく「新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるとよい」という話がありますが、現状を見ますと、新しい革袋に入れたぶどう酒が「古いまま」という部分があると思います。

先生の役割は変わり、ICTの新しさに合わせた中身・形で、教室にどのようなコミュニケーションをつくっていくかが、非常に重要になります。ここは、テクノロジーに大いに期待したいところでもあります。皆さん、どのようにお考えになったでしょうか。少しでもお役に立てばうれしいです。

第2部：実践報告・実践研究

英語の授業・学習において どのようにICTを活用していけるか

①実践報告
『言語活動を行う中でのICTを活用した実践と資質・能力の育成』

発表者・登壇者：**俣野 知里**（京都市立二条城北小学校）／**酒井 英樹**（信州大学）

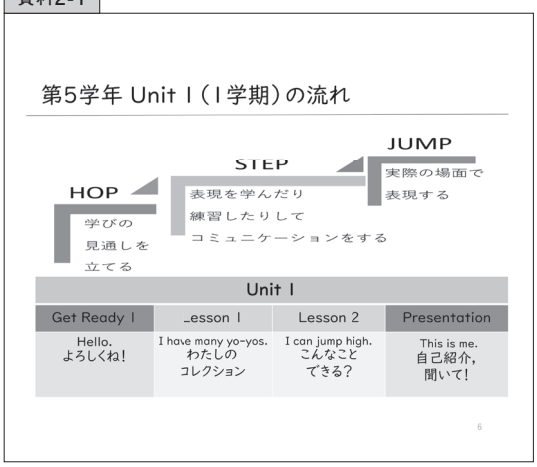
酒井先生：第2部の前半では、英語の授業・学習においてどのようにICTを活用していけるか、実際の実践をもとに考えていきたいと思います。言語活動の中でのICTの活用にポイントを置き、京都市立二条城北小学校の俣野知里先生にお話しいただきます。よろしくお願いします。

俣野先生：現在は京都市立二条城北小学校に勤めておりますが、2022年3月までの3年間、京都教育大学附属桃山小学校の英語専科教員として、1年生から6年生までを指導しておりました。研究の重点の1つとしてICT教育に取り組んでいた附属桃山小学校では、私が赴任した時には既に1人1台端末の整備が進んでおり、独自の教科「メディアコミュニケーション科」での学習を通して、端末をどのように使うか、どのような点に気をつけたらよいのかをよく知っている状態でした。外国語活動・外国語の授業は、私と常駐ALT、担任の先生とで教え、1、2年生は35時間、3、4年生は70時間の外国語活動、5、6年生は公立と同じ70時間の外国語の授業を実施していました。

本日は、①「聞くこと」「話すこと」の学習、②「読むこと」「書くこと」の学習、③「振り返り」の3パートを柱にお話をさせていただきます。

まず、①「聞くこと」「話すこと」について、附属桃山小学校の第5学年の1学期に授業をしたUnit1自己紹介の実践例をもとに報告します。附属桃山小学校では、教科書『CROWN Jr.』を使用し、HOP、STEP、JUMPのステップを踏みながら、1学期間かけて段階的に力を伸ばしていくかたちで授業を進めていました（資料2-1）。

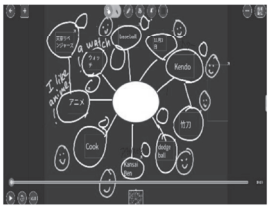
資料2-1



資料2-2

考えの整理・自分のことについて伝える準備をする

指導者からのフィードバック



HOP段階では、コロナ禍の影響でオンライン授業が中心でしたので、児童に今の自分の力で言えることを録画記録してもらいました。そして、その動画と単元末時の自分とを比較して、変容に気づくことができる活動につなげました。

STEP段階では、自分のことについてALTに伝える活動をしました。学期を通して言える表現が増えていくので、随時書いたウェビングシートを見直し、書き足していけるようにしました。また、イヤホンマイクで自分の発話を録音し、聞き返し、分かりにくいと感じた部分は、言い直す等の活動を重ねました。また、活動を進める中で、児童が提出した動画へのフィードバックを数回行い、うまく言えたところにニコちゃんマーク、惜しかった部分にはびっくりマークをつけるなどして、よりよい紹介につなげました。また、動画を通じて1つだけALTに質問をし、それに対して返事がもらえるようにする等、英語でのやり取りを楽しむことができるようにしました（資料2-2）。

JUMP段階では、チャレンジタイム（パフォーマンス・テスト）を設け、自分のことをALTに紹介する活動をしました。パフォーマンス・テストの様子は動画で記録し、振り返りや学習改善に活用できるようにしています。

続いて、②「読むこと」「書くこと」の学習です。外国語の「読むこと」「書くこと」の学習は、一般的には5年生から始まりますが、附属桃山小学校では私が赴任する前に研究開発校の指定を受けていた経緯もあり、外国語教育には1年生から取り組んでいました。中学年では週2時間の授業がありましたので、読み書きの素地になる活動は、3年生から取り入れていきました。共通教材Let's try!「アルファベットとなかよし」の内容を膨らませ、全7時間の単元計画を立てました（資料2-3）。最初は、

資料2-3

単元計画（全7時間）

時	目標	主な活動 〇評価規準（方法）※記録に残す評価：第6・7時
1	身の回りにはアルファベットの文字で表されているものがあることに気付くとともに、大文字の読み方を知る。	・身の回りの写真や誌面から、アルファベットの文字を見つけたり、何を表しているかを考えたりする。 ・歌The Alphabet Songを聞く。 ・指導者のALPHABETクイズの様子を見る。 〇身の回りにはアルファベットの大文字で表されているものがあることに気付いている。（観察・振り返りシート）
2 3	大文字とその読み方に慣れ親しむ。	・歌The Alphabet Songを歌う。 ・指導者のWhat is the letter?クイズに答える。 ・指導者のALPHABETクイズに答える。 〇活字体の大文字の読み方を聞いたり言ったりして文字と一致させている。（第1時に同じ）
4 5 6	大文字とその読み方に慣れ親しみ、ある文字について尋ねたり答えたりして伝え合う。	・歌The Alphabet Songを歌う。 ・指導者のWhat is the letter?クイズに答える。 ・Get “M/Z” Gameをする。 ・指導者のALPHABETクイズに答える。 ・文字の形に着目して、グループを作る。 ・校内に隠れた大文字を探し、写真に撮る。 ・友達のALPHABETクイズに答える。 〇大文字の読み方を聞いたり言ったりして、伝え合っている。（第1時に同じ）
7	相手に伝わるように工夫しながら、ALPHABETクイズを出したり、クイズに答えたりしようとする。	・指導者のALPHABETクイズに答える。 ・友達同士でALPHABETクイズをする。 〇相手に伝わるように工夫しながら、クイズを出したりクイズに答えたりしようとしている。（第1時に同じ）

身近にあるアルファベットの大文字を探すことから始め、読み方に慣れ親しむ活動、文字画像を指でなぞる活動などを通して、文字への興味・関心を広げていきました。

アルファベット26文字に一挙に慣れ親しむことは難しいので、楽しみながら文字の形だけでなく、アルファベットの読み方にも繰り返し慣れ親しむ活動を行いました。さらに、マスクをしたままの授業では、口元を見せることができないため、ALTが自分の顔の横にアルファベットの大文字を書いたカードを示し、その読み方を言う動画を作りました。動画を見ながら学習している児童の様子を見ると、画面に映し出されたALTの顔の大きさが少しずつ違っていました。口元に注目し、大写しにして、真似をしている児童もいます（資料2-4）。AからZまでを1本にまとめた動画だったので、自分が聞きたいところ、知りたいところに焦点をあてた見方をする児童もおり、それぞれの学び方があることに改めて気がつきました。

資料2-4

それぞれの学び方で学ぶ

自分で文字を書いてみたい気持ちが高まる4年生では、絵カードの一部を書き換えることや、例を見ながらオリジナルカードを作成する児童の姿がよく見られるようになってきました。個人端末のデジタル教科書を使い始める5年生では、テキストを端末に打ち込んだり、文字画像をなぞったり、文字を書き写して練習したりする姿も見られるようになりました。単語や文が少し読めるようになるの

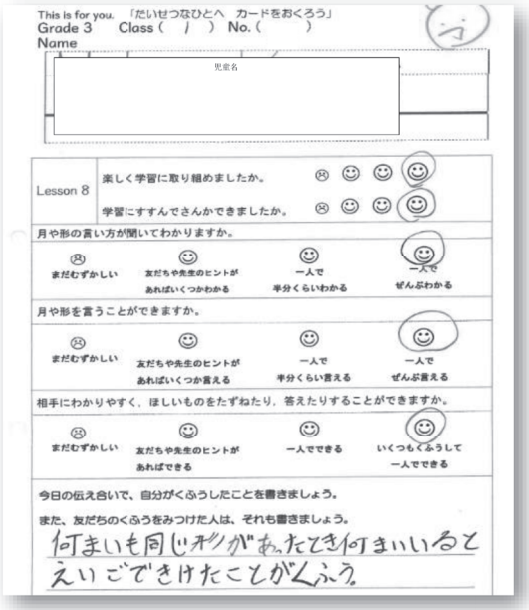
で、単語カードを並べた文づくりや4線上に文字を書き写すことも始めます。ただし、端末では4線上に文字を書くことは難しかったので、書く活動は紙と鉛筆で続けました。数文程度の文が読めるようになる6年生では、音と文字のつながりを大切にし、ALTの音声を何回も聞いた後に、英文を見せるようにしました。また、書きたいことが増えてくるので、用意した表現を参考にしながら、それぞれが書きたいことを書き写したり、自己紹介ポスターを作成したりする活動を行いました。

次に、「振り返り」についてです。小学校に外国語が導入された時から振り返りシートの活用を試みていますが、今もまだ模索中です。1年生から6年生の発達段階に合わせた項目を設定し、できるようになりつつある自分を自覚できる振り返りシートを意識して作っています。振り返りシートは1年生から導入しており、学年に応じた項目を設定し、友だちが考えた工夫にも視点を広げていけるものにしています（資料2-5）。

5年生、6年生では、ICTを活用した振り返りを行いました。5年生では、クラスの人数分のスライドを用意し、毎時間振り返りをしました。友だちのスライドを見ることもできるので、私が共有したいと思ったところは青字に変え、クラス全体で振り返る時間を次の授業につくるようにしました。自分の力が伸びたのは、どのような学び方によるものなのかを振り返りの視点とし、自らの目標に向かって学びを調整しようとする意識の高まりを狙っています。外国語の学習では、漢字や計算のように、できるようになったという明確な実感をもちにくいことがありますから、どのように学びを工夫すればできたのか、またできるようになるのかに意識を向けさせることで、自分に合う学び方を見つけるきっかけになればと考えています。単元を通して同じスライドに書き

資料2-5

学習の「振り返り」（第3学年2学期）


This is for you. 「だいせつなひとへ　カードをおくろう」
Grade 3　Class (　/　)　No. (　　)
Name

児童名

Lesson 8	楽しく学習に取り組めましたか。	☹	☺	☺
	学習にすすんでさんかできましたか。	☹	☺	☺

月や形の言い方が聞いてわかりますか。

☹ まだむずかしい	☺ 友だちや先生のヒントがあればいくつかわかる	☺ 一人で半分くらいわかる	☺ 一人でぜんぶわかる

月や形を言うことができますか。

☹ まだむずかしい	☺ 友だちや先生のヒントがあればいくつか言える	☺ 一人で半分くらい言える	☺ 一人でぜんぶ言える

相手にわかりやすく，ほしいものをたずねたり，答えたりすることができますか。

☹ まだむずかしい	☺ 友だちや先生のヒントがあればできる	☺ 一人でできる	☺ いくつもくふうして一人でできる

今日の伝え合いで、自分がくふうしたことを書きましょう。
また、友だちのくふうをみつけた人は、それも書きましょう。
何まいも同じ形があったとき何まいいるとえいごできけたことがくふう。

続けていくので、自分の変容にも気づき、友だちのよいアイデアも一緒に取り入れているようです。

操作に慣れた6年生では、より見やすいスプレッドシートを用い、振り返りコメントを各自が打ち込めるようにしました。5年生と同様に、私がみんなに見てほしいと感じたもの、これからの学習のヒントになりそうなアイデアは文字の色を変え、目がいきやすいようにしています。

最後に、これは現任校の5年生の振り返りシートです。京都市に戻り、使用する教科書やICTの環境が変わりましたので、振り返りシートも変えました（**資料2-6**）。自校や教科書のCAN-DOリスト等を参照し、単元ごとに1枚ずつ作成しています。各単元での到達レベルを4段階で設定し、毎時間の達成した段階に、学習した日付を加筆します。また、2時間に1回程度、振り返りコメントを書く時間を設けています。シートには、単元の初めに自分で設定した目標、My Goalを書く欄を作り、好きな時に加筆できるようにしています。また、学習に関して友だちに相談したいことは青字で書き入れて、友だちと相談し合う時間をつくり、話し合えるようにもしています。振り返りコメントの記述を2時間に1回ずつにしている理由は、コロナ禍の影響等による積み上がり方の違い、学習時間の不足等で、振り返りの時間をたくさん取ることが難しいからです。ただ、自己変容は自覚してほしいので、日付だけは毎時間書き、振り返りコメントは2時間に1回程度にしています。振り返ることに慣れると、My Goalを意識でき、ゴール達成にどれほど近づけているかも見えるようになっていきます。

ここまで3つの柱に沿ってお話をさせていただきました。ICTが導入されるまでは、テキストを広げた机の上で作業をしていたので、次の時間にそれを使うことや友だち同士で見せ合うことに手間が

資料2-6

児童の振り返り

＜第1時＞
11月4日：日付＋記述
＜第2時＞
11月8日：日付
＜第3時＞
11月10日：日付＋記述
＜第4時＞
11月16日：日付＋記述

He can run fast. She can do Kendama.「友達や先生のことをよりよく知るために、紹介クイズを出し合おう」
【Our Goal】自分や他の人ができることやできないことを紹介することができる。

伸ばしたい力	今の自分の力			
聞くこと	できることやできないことを聞いて、理解しようとしているが、まだ難しい。	先生や友達のヒントがあれば、できることやできないことを聞いて、ほとんど理解することができる。	できることやできないことを聞いて、ほとんど理解することができる。	できることやできないことを聞いて、全て理解することができる。
日付		11/4　11/8	11/10　11/16	
話すこと［やり取り］	友達とできるかどうかをたずね合うことができている。ただ難しい。	先生や友達のヒントがあれば、友達とできるかどうかをたずね合うことができる。	友達とできるかどうかをたずね合うことができる。	相手の話に反応しながら、友達とできるかどうかをたずね合うことができる。
日付			11/10	11/16
読むこと	できることについての音声を聞いて、文字を指で追おうとしているが、まだ難しい。	先生や友達のヒントがあれば、できることについての音声を聞いて、文字を指で追うことができる。	できることについての音声を聞いて、文字を指で追うことができる。	できることについての音声を聞いて、ぴったりの速さで文字を指で追うことができる。
日付				
話すこと［発表］	先生にインタビューをしたが、できることやできないことを紹介することはまだ難しい。	先生や友達のヒントがあれば、先生にインタビューをして、できることやできないことを紹介することができる。	先生にインタビューをして、できることやできないことを紹介することができる。	先生にインタビューをして、これまでに学習した表現も使いながら、できることやできないことを紹介することができる。
日付				

日付	自分にぴったりの学び方を見つけよう！「学びの足あと」（①②について書こう）	
11/4	①【My Goal】この学習でできるようになりたいこと（とちゅうで付け足しも○） みんなのできること・できないことについてすべて理解できて、自分のことを言えるようになること。	②My Goal達成のための学び方の工夫（黒字） 先生の話し方や、手本の話し方をよく聞いて真似してみること。
11/10	①My Goalについてできるようになってきたこと なにができてなにができないのか友達に問いかけれるようになりました。そしてそのような質問に答えられるようになりました。	②My Goal達成に向けてうまくいった学び方の工夫（黒字） うまくいかなかったのでみんなに聞いてみたいこと（青字） 手本を真似して言ってみたり、先生が言っていた言葉を覚えたりしたからできるようになった。

かかりました。今では、各自がデータを提出するだけで、クラス共有ができ、次の時間も同じものが再現できます。また、児童にデジタルカメラを貸し出して使っていた時は、写真の撮り直しやプリントアウトが大変でしたが、1人1台端末では、すぐに撮り直しができ、児童自身でできるので、ICTの便利さ、時間短縮の効果を感じています。また、成果物等に赤字で添削すると、書き直しが大変になるので、付箋に書き込んだりすることが多かったのですが、端末上であれば、私の添削を見て、自分で手元にあるワークシートの間違えた文字を消して直せるので、作品に赤字を残すことがなくなり、便利になりました。

言語活動におけるICTの活用はまだ模索段階ですが、教師が目指す児童の姿を明確にしてから、ICTの使い方を考えることが大事であると感じています。最初は、ICTで何ができるのか、どのようにしたら機器が動くのかを試すことで精一杯でしたが、機能をいろいろ試し、ある程度の機能が分かった時に、何のために使いたいのかに意識がいくようになり、児童につけたい力から機能の有効性を考えられるようになりました。この考え方は今も大事にしています。

ICTの活用において、児童のICT活用状況を把握することは大事です。他教科の授業での使用状況を把握していないと、これは知っていると思って用意したことが「やったことがない」ことだったり、逆に説明がいると思っていたことが「もう知っている」ことだったりします。説明に時間がかかることと、すぐにできそうなことをイメージできていることで、1時間の中に設定できる活動を変えられますし、他教科とのつながりを意識した、児童を広く見た有効なICT活用ができます。大きな枠で捉えたICTの活用が、大事だと感じています。以上です。ありがとうございました。

酒井先生：ありがとうございました。では、私からいくつか質問させていただきます。ICTは外国語だけでなく、他教科でも使っているので、ICT活用の状況を把握することが大事とお話しされていましたが、他教科で使っているが、外国語の授業で生かせていないことや、外国語の授業での使用方法が、他教科に広がっていくというような教科間で「使うよさ」について、ご経験やお考えはありますか。

俣野先生：教科を問わず、ノートやワークシートを使用していた時より、共有がしやすくなりました。課題や回答結果等が、提出箱にデータ提出されるだけで、回答を自分の席で、画面で見ることができ、時間も短縮されました。また、教師が示すモデルよりも、友だちが作ったものや書いたものがヒントになることが多いので、データで簡単に共有できるよさを感じています。

外国語から他教科へ広がった使い方としては、オンライン授業が中心であった時期に、1年生に、指導者が英語で挨拶をする動画を送り、その返答として英語で挨拶をする様子を家庭で録画し、送り返してもらいました。「1年生でも動画を撮って送れる」ことに、他の先生も気づき、国語の音読や音楽の鍵盤ハーモニカを弾いている動画を提出させる活用へと広がりました。

外国語でのICT活用に難しさを感じるのは、例えば、国語や社会では、文字での情報がヒントになりますが、小学校での外国語は音声を中心としているので、文字は支援になりにくいことです。社会などで行う新聞等の資料の読み取りは、英語で

はまだ難しいので、資料の使い方には難しさを感じています。

酒井先生：小学校英語の場合、音声から入りますので、小学校でICTを扱う時には、文字に頼った活用にならない方が適切ということですね。

次の質問は、ICTを使い始めた最初の頃に格闘したことや、それまでの授業と今の授業で変わった点、あるいは変わらなかった点があれば教えてください。

俣野先生：私はICTが得意ではなく、児童の方が操作に慣れている、扱いに慣れている状況から始まりました。1人1台端末の活用で生まれる学びの多様性に、衝撃を受けました。動画の見方1つをとっても、活用の仕方は異なり、一人ひとりが学びやすい方法を用いればよいことを感じ、そこから固定した考え方は減った気がします。

酒井先生：個別最適化というと少し難しく考えがちですが、小さいところでも学び方の選択をしており、そのことに俣野先生がICTを活用することで気づかれ、それを今回教えていただいたと思います。

また、読み書き、文字学習では、ドリル学習的なものが多くなりがちですが、俣野先生は、気づきを増やす、それを基にやり取りをする、また児童自身が探しにいきたくなる気持ちを育てることを大事にされていますが、知識および技能の側面での指導でICTを活用する際に、気をつけている点、心がけている点はありますか。

俣野先生：やり方を固定してしまうと、そのやり方が合わない児童は辛くなることがあります。特にスローラーナーの児童は他の教科でも同じで、例えば3年生になると学習する漢字が一気に増えて難しくなり、特に書く活動で大きな差が生じてしまいます。書く活動において、間違った字を何度も書き続けるのは意味がありません。その場で私が気づければ違う部分を伝え、それ以降は正しく書けますが、全体を見る中で気づくことができず、集めた結果、気づくこともあります。そのため私は、書く活動では、一度に同じものをたくさん書かせないようにしています。全員で取り組む量は多くせず、丁寧にしっかり見本を見て書くことにしています。もっとやりたい場合は、やりやすい方法にすぐにアクセスできるように、音声つきの絵カードやALTの動画を送り、教科書で見たらよい箇所や、どこから何を引っ張ってきたら自分の力がさらに伸びるかを示した情報を共有するようにしています。意欲のある児童は自ら積極的に活用し、サポートが必要な児童にはこちらから伝えて、気に入った方法で進めていけるようにしています。

酒井先生：今後、試してみたいICTの活用法はありますか。

俣野先生：今年度から京都市では、家庭学習として、紙の計算ドリルの代わりにAIドリルが導入されました。本校では端末を持ち帰り、使える状況ができていますから、今後は外国語も、家庭学習の1つとして取り組むことができるかもしれないと考えています。外国語の授業は週2時間しかありませんので、家でもやってみたいと思える学習、ドリルではなく、面白そうだからやってみたいもの、週2時間の間をつなぐものを考えたいと思っています。

酒井先生：これは中・高も同じですね。家庭学習の中でICTをいかに使い、工夫していくかは大事だと思いました。俣野先生、貴重な実践をご紹介してくださってありがとうございました。

②実践研究
『「論理・表現」でICTを活用して書く意欲を高めるには』

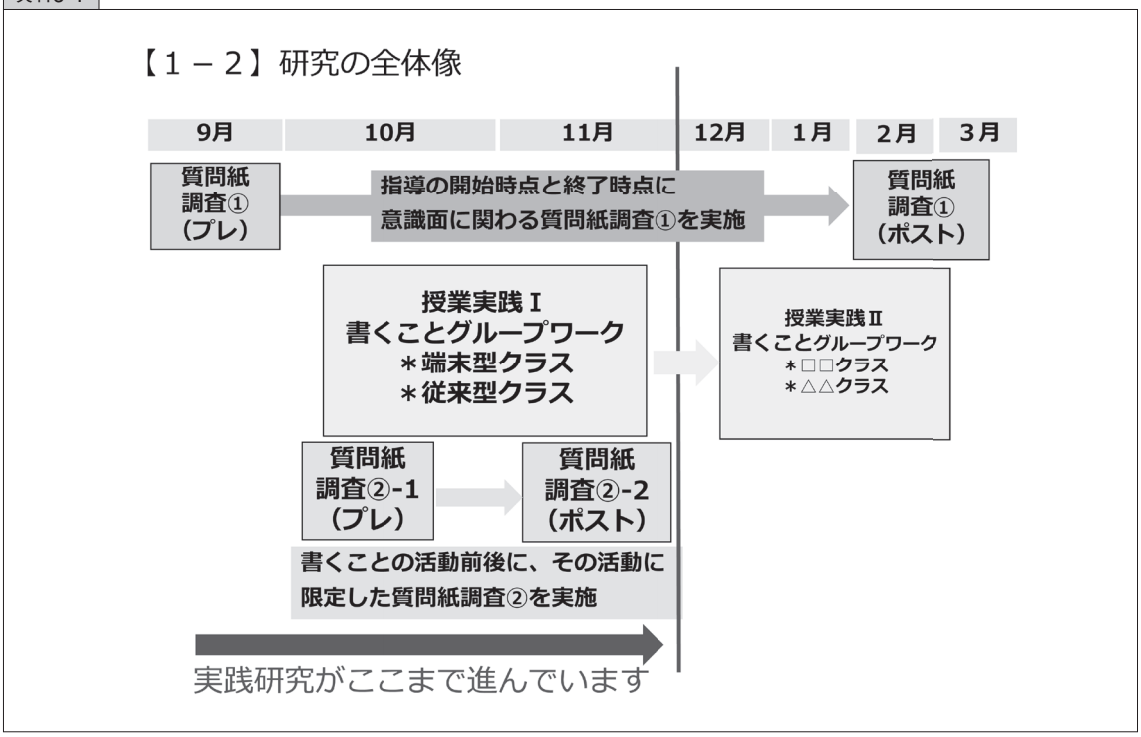
発表者・登壇者：工藤 洋路（玉川大学）／津久井 貴之（群馬大学／大妻中学高等学校）／
長沼 君主（東海大学）

工藤先生：第2部の後半は、実践研究の発表になります。最初に私から研究の全体像、および研究の概要と生徒の実態の報告をいたします。続けて、津久井先生から授業の実践の報告、そして最後に、長沼先生からまとめをしていただきます。

本実践研究の目的は、英語で書くことに不安や抵抗感があると思われる高校生の英語で書く意欲を向上させるために、学習や指導において、どのようにICTを活用するとよいかを探ることです。研究課題は、①ICT活用の有無や活用方法の違いによって、生徒の書く学習への取り組み方が変わるか、②生徒の学習への取り組み方の違いによって、書くことへの意識に違いが生じるか、になります。研究は今年度の9月から始まり、年度末までとしています（資料3-1）。

まず、書くことへの意欲、およびICT使用等に関するプレ質問紙調査①の結果と、授業実践Ⅰの前に行ったプレ質問紙調査②-1の結果を共有します。

資料3-1



調査は、津久井先生が担当する2クラス、74名を対象に、研究が始まる時点での生徒実態を調査する目的で35項目の質問をしました。最初の17項目は意識・意欲・信念などに関するもの、次の14項目はICTの活用に関するもの、そして、最後の4項目は自主学習、家庭学習に関するものです。生徒には、各項目について、「4.とてもそう思う」「3.まあそう思う」「2.あまりそう思わない」「1.全くそう思わない」の4つから、最もあてはまるものを選んでもらいました。この4つの回答を数値化して、各項目で平均を出しました。授業者・実践者の意識や視点を大事に、実践者津久井先生が、アンケート結果で注目した点を抜粋し、お伝えします。まず、項目3「自分の意見や考えなどを英語で書くことに抵抗感がある」は、平均値が2.41でした。よって、半数近い生徒が研究開始時の9月の時点で、「書くことに抵抗感がある」ことがうかがえました。この生徒の状況に関して、コメントをいただければと思います。

津久井先生：4月から週1回、非常勤で指導している高校1年生ですが、生徒たちの書くことへの抵抗感は、当初から私も気になっていました。私からのフィードバックのコメント等は楽しみにしているようでしたが、書き始める前は身構えてしまう様子がありましたし、一生懸命たくさん書いてくれますが、通じない英語を書いている生徒もおり、そこから抵抗感へとつながってしまわないかも気になっていました。

工藤先生：それと連動して、項目13「先生や友だちに英語で自分が書いたものを読んでもらいたいと思う」と項目14「先生や友だちに自分が書いたものに対してコメントをもらうのは嬉しい」では、2.64と3.05で少し差が見られます。ここに生じている差は、抵抗感と関係があると思われますか。

津久井先生：授業の終わりに生徒の書いたものを返す時に、同じようなことを感じることがあります。うれしそうにコメントを読みますが、ライティングの単元が始まると、楽しそうではなくなる雰囲気は感じています。

長沼先生：自ら読んでもらいたいほどの自信はないですが、友だちや先生からのコメントを読むことは楽しい。コメントを読みたいという気持ちが、書くことへの抵抗感を低下させ、協働的な作業を楽しむ風土を育てるのかもしれません。項目16「友だちが書いたものを読んだとき、表現や書き方などを真似してみたいと思う」は、まさに学び合いの風土が育まれていると思いますが、普段の授業から起こっているのでしょうか。

津久井先生：自分の書いた英文を近くの人に見せたり、ブレーンストーミングの段階で共有したりすることは、抵抗なくやれていると思います。

工藤先生：次は実践実施校でのICTの活用について、簡単に説明をお願いします。

津久井先生：Chromebookを使っていますが、授業で使うことは多くなく、Google Classroomで先生からの課題やコメントを生徒たちが確認する程度のようです。1学期のスピーキング活動では、パフォーマンスの撮影、見直し、友だち同士でのコメントのやり取りに使いました。

工藤先生：今回の対象生徒は、毎時間ICTをたく

さん使っているわけではないということですね。項目27「機械翻訳やスペルチェック機能を使うことに罪悪感がある」では、「罪悪感がある」との回答が多かったですが、どう思われますか。

津久井先生：私から直接は言っていませんが、生徒の翻訳機能を使ってはいけないという意識は、授業者として少しもったいなくもあり、翻訳ツールの使い方を指導できていないという点は申し訳ない気持ちがあります。

工藤先生：長沼先生、ほかの観点も含め、ICT関連の回答についていかがでしょうか。

長沼先生：罪悪感に関しますと、項目26「機械翻訳やスペルチェック機能を使えば正しい英文を書くことができると思う」の回答は肯定的で、その有能性を認識していることがうかがえます。現実世界ではこうした道具を手足の延長として使用しており、生徒が使ってはいけないと思っていること、教室で使うことがタブー視されていることはもったいないですが、英語学習において発達途上な生徒が安易に頼ってしまうことは、確かによくありません。完全な排除ではなく、上手な使い方を考える必要はあるかもしれません。

項目22「授業内外を問わず、英語で書くとき、どんな評価（点数やコメント等）がもらえるか気になる」と思う生徒の割合は高いですが、項目23「授業内外を問わず、これまで自分が書いた英文の表現や書き方をふり返って読み直すことがある」、項目31「Classroom上のコメントを参考にし、授業の予習や復習として英文を書いたり書き直したりすることがある」は若干肯定度が低いので、ICTの利点を活かして、生徒が教室外で自律的に書いたものやコメントなどにアクセスするようになるように、教師が授業で仕かけていくことが大事だと思います。

工藤先生：では、授業の実践内容の報告をお願いします。

津久井先生：実践は、非常勤でお世話になっている大妻高校の「論理・表現I」の1単位分を対象に、週1時間担当している2クラスを、ワークシートを中心とした「従来型」とJamboardを中心とした「端末型」に分け、同一単元計画を基にした指導を行いました。

これは単元計画の概要で（**資料3-2**）、使用教科書『FACTBOOK』（桐原書店）内のfair tradeの単元内容からライティング活動を設定しています。目標は、外資系企業が出店する店で、選んだ国の豆を用いたfair trade chocolateを扱ってもらえるように、提案書を書くことです。指導概要は合計5時間で行う計画で、1時間目では、動画視聴と感想共有を行った後に4か国から1か国を選び、2時間目では、選択した国の情報共有を英語と日本語で行います。3、4時間目のグループ活動では、調べたことをプリントで共有する従来型クラスと、Jamboardで共有する端末型クラスに分け、ライティング活動だけでなく、スピーキング活動も行います。3時間目は情報やメモの共有をした後、各自がライティングをし、4時間目はグループ内で互いの英文にコメントをつけて共有した後、私からのフィードバックと合わせ、ライティングを仕上げます。

端末の使用以外は、両クラスでの指導は大きく変えないようにしました。グループ活動時の班分けは、両クラスとも、事前アンケートで把握した生徒のライティングへの抵抗感の程度がミックスされる組み合わせにしました。また、書いた英文を読み合う活動の前に、書き手自身がどのような思いでその英文を書いたのかを、自分のライティングにコ

メントするように伝えました。また、リライトする回数は、できるだけ多くなるように工夫をしました。高校1年生ですので、中学校までの経験を生かして書くことを共通の工夫とし、型にあてはめるだけにならないよう、教師から型を与え過ぎないように気をつけました。

従来型のクラスでのブレーンストーミングは、メモを手書きで残し、ワークシートを使いました。端末型では、個人用に1枚とグループ（3、4人）ごとに2枚のJamboardを用意しました。他グループの内容は、データ共有で見られるようにし、個人のライティングは、構成や展開を考える段階から個人用のJamboardを使い、グループ内だけで共有し、内容や展開を参考にできるようにしました。また、生徒が授業中に画面上でどのような作業を行っているかを知れるように、画面録画をしてもらいました。録画内容を見返すと、情報収集を行うためのサイト、友だちのライティングや翻訳サイトなど、様々なページやファイルなどを行き来していることが分かりました。研究的な側面で記録しましたが、授業者として閲覧ページや途中のプロセス、学習内容を見ることができ、非常に意味がありました。

できるだけ詳細に授業記録をつけ、振り返りを残しました。従来型では、メモを英語で手書きするなど、英語を使う協働作業がスムーズに行われていました。端末型では、日本語での書き込みがやや多く、日本語の情報をもとに協働、共有が広がっていく様子がうかがえました。「できるだけ英語で」と指示はしましたが、収集した情報と自分が書ける英語にギャップがあるようでした。また、生徒が書く英語の量にも違いが見られ、ワークシートを使用した従来型は量が多めで、端末型は文を入れ替える作業が簡単にできるためか、最初に示された目安の語数に近い量に整理できていました（資料3-3）。

授業者として一番強く意識した点は、従来型は教科書やワークシートの情報に思考が制限されそうだったので、できるだけ広げる意識で、付加的な

資料3-2

2. 単元の指導の概要

1　単元　FACTBOOK（桐原書店） Unit 8 fair trade

2　目標

fair trade chocolateを扱ったことのない外資系の企業が出店するお店で、あなたが選んだ国の豆を用いたfair trade chocolateを扱ってもらえるように提案書を作成しよう。

3　指導計画概要

時間	主な言語活動・学習内容等	家庭学習や支援等
1	単元の概要や取組の説明 fair tradeに関する**動画視聴、感想共有**	４カ国から**１つの国を選んでくる**
2	fair tradeに関する理解（**教師の英語による説明**など）**選んだ国の情報共有（英語＋日本語）**	選んだ国のリサーチ
3	fair tradeに関する質問に英語で答える。 **グループ活動（情報やメモ、Jamboardの共有）**	**1回目のライティング**を書いてくる
4	**グループ活動（１回目の英文にコメント）**	**２回目のライティング**を書いてくる
5	2回目の英文に文法や内容、場面、表現などの**教師の全体フィードバック**。	教師は全生徒に個別フィードバック、生徒は、**最終版（３回目）を書いて提出**

情報を英語で紹介し、やり取りやクイズなどをしました。逆に、端末型は広がりやすいので、英語の授業の目標や英語を使う言語活動に収束させることを、英語で文を書く行為につながるようにすることを意識して指導しました。情報提供ではなく、英語で文を書く行為につながることを意識的に伝えました。

工藤先生：貴重な報告をありがとうございました。端末型と従来型の違いだけでなく、学習のプロセスや教師の指導のあり方が変わることもみえてきました。

研究開始時と活動直前の意識をクロス分析した結果、肯定的な変化が見られましたし、活動後は両クラスとも肯定的な回答でした。授業を担当された身としていかがですか。

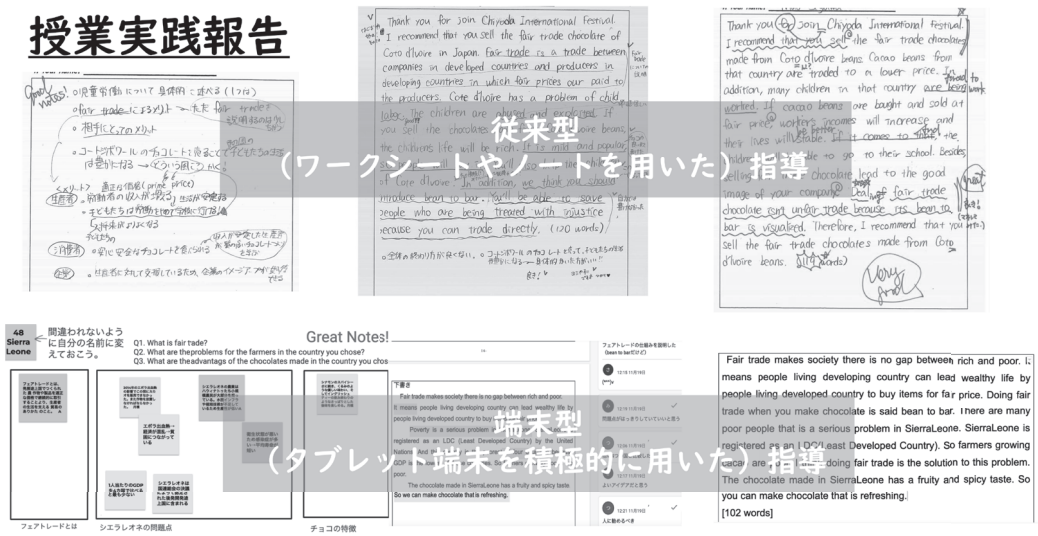
津久井先生：ほっとした部分もあります。研究開始時の意識調査からも、読んでもらいたいという潜在的なモチベーションはみられていたので、今回に限らずですが、できるだけ英文訂正、添削にコメントが偏らないようにしました。文が全くうまく書けていない場合は早めにサポートしますが、序盤で形式へのコメントやフィードバックを極力避けるようにしたのは、それなりに意味があったと感じています。

工藤先生：活動実施後のアンケート項目3「ワークシートを使って友だちとアイデアを交換したり話し合ったりしたことは楽しかった」は肯定的な回答が多く、端末型のクラスではよりポジティブでした。これをどのように捉えますか。

津久井先生：これまで端末やドキュメントの共有機能を使う機会が少なかったため新鮮だったことと、SNSでコメントし合うことに慣れているので、いつも使っているツールに近い形で楽しくできたことが要因だと思います。

長沼先生：端末型は新規性があると思いますし、その結果、「最後の作文がよく書けたと思う」への肯定的な回答が多かったのはよかったです。日本語の使用がやや多い懸念はありますが、書けたと

資料3-3



群馬大学・大妻高等学校　津久井貴之

いう意識、できる感が高まったことは、とてもよいと思いました。

工藤先生：研究開始時と活動直前での抵抗感の変化をクラス別に「ない・ない」「ない・ある」「ある・ない」「ある・ある」の4パターンに分け、活動後の抵抗感がどのように変化したかを比べました。活動前の抵抗感が活動後に解消された生徒が、端末型・従来型の両クラスともに一番多く、効果的なツール活用だけでなく、教師の適切な指導や協働学習等の様々な要因が重なり、最終的に抵抗感が解消されたことがうかがえます。端末の活用だけに効果が表れたわけではないということです。

学習プロセスや教師のかかわり方の視点から実践授業を振り返ると、端末型では日本語でのメモがたくさんありましたが、日本語のアイデアがたくさん出ることについてどのように感じられますか（資料3-4）。

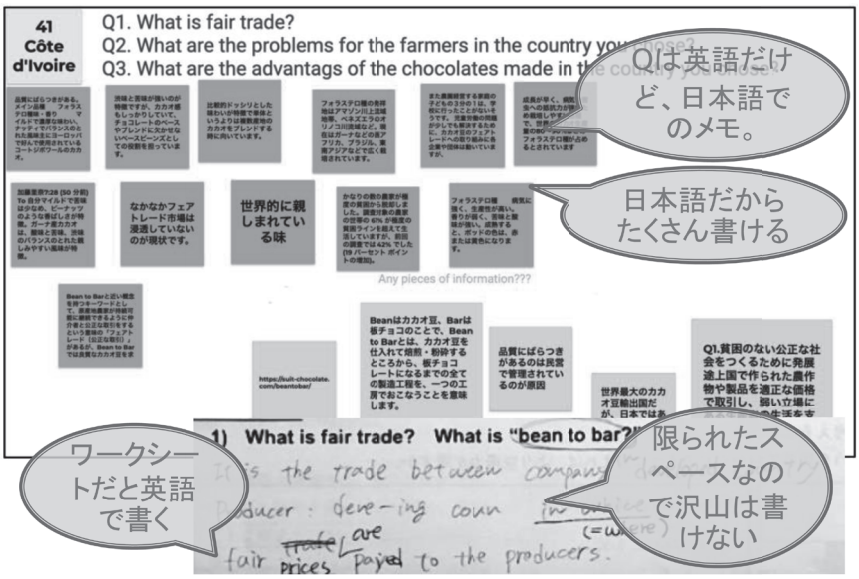
津久井先生：日本語での議論を目標の英文ライティングに収束させるために、情報インプットは英語のサイトを参考にするように紹介しました。しかし、これでよいのかなという違和感や危機感は変わらずにあります。

工藤先生：「対話的な学び」は、学習指導要領のキーワードでありますが、対話にはいろいろな解釈があると思います。母語（日本語）で、協力して活動に取り組むのも対話ですが、学校教育の中で英語を学んでいますので、英語でのやり取りによる対話的な学びを中心にしていくことは、どのように捉えていますか。

長沼先生：英語で英語の授業を基本とする中、日本語が増えてしまうとどうなるかは、小学校でもよく議論されています。アイデンティティーにもかかわりますし、思考をまとめる時に母語に頼ることは悪くはありません。日本語をうまく使っていける形になればよいと思いますが、母語で拡散した内容をどう英語に収束させていくかですね。例えば、英語に直しやすい日本語に整理させたり、英語で読みやすいサイトを紹介してそこから表現を借りてこさ

資料3-4

学習プロセスや教師の関わり方など



せたりといった支援を進めていくことも1つだと思います。何事もまずは表現してみることが大事ですので、その意味ではうまく機能したと思います。

工藤先生：津久井先生も生徒の広がったアイデアを丸で囲んだり、コメントを入れたりしながら、整理の仕方を伝えていました。また、アイデアが日本語で広がった時には、英語での表現方法を指導したり、表現を学ぶことができるウェブサイトを紹介したりなど、英語モードに誘導していく仕かけをしていました。英語の方向にもっていくことについては苦労されたのでしょうか。

津久井先生：グループワークでは従来型クラスは、英語でのインタラクションで進んでいきましたが、端末型では、想定したようには進まず、日本語の使用が多くなってしまいました。とはいえ、教師と生徒や生徒同士のペアワーク活動では、使える英語は制限されていましたが、調べたことを英語で表現しようとしていました。そこでは、読みやすく、分かりやすい英語を提示するなどの支援もしました。

長沼先生：生徒自身がどのようなサイトを見ればよいかを分かっていくためには、教師がサイト情報を共有してあげるとよいと思います。正確性へのコメントではなく、生徒の言語表現が広がるコメント、支援する言葉がけを心がけることも大事ですね。また、ワークシート上での切り貼り作業は技術的に難しいこともあるので、生徒から出てきたものをベースに実際に教師が整理し、動かし、見せることも効果的です。生徒の英文がどのように整理されるか見せることは、関係のないモデルを見せるよりも生徒に響き、訴えかけるものになるのではと思います。

工藤先生：従来型の指導からICTの活用を多く取り入れた指導に移っていくことは、ツールを使うことだけでなく、学習プロセス、指導プロセスを変えていくことでもあります。では、今後について簡単に、津久井先生からお願いします。

津久井先生：授業実践をする立場として、目的・場面・状況の設定の大事さを改めて感じました。

資料3-5

	端末型クラス（Jamboard・ドキュメント使用）	従来型クラス（紙のワークシート使用）
ツールの特徴や印象	■ プロセスの可視化・共有がしやすい（単語・フレーズレベルでしか言語化できないアイデアも載せやすい） ■ 色の影響もあり、視覚的に華やかな印象	■ しっかり英文を書くフォーマルな学習を行う ■ 手書きなので、生徒の人柄が見える気がする…（手書きも捨て難い・・・）
使用言語とアウトプット傾向	■ （事前の指示がなかったため）自然に日本語での共有になったため、多くのアイデアが出た結果、それを整理するための教師のサポートが必要になった	■ シートでは、活動の指示や質問などが英語で書かれているため、生徒も自然に英語で書いていた
協働学習の進め方	■ 授業外も含めて、常に共有が可能で、共有作業と個人作業が同時進行する ■ 生徒間でカジュアルな意見交換がしやすい（SNSの影響か）	■ 共有は授業内で教師が指定するタイミングで行う ■ シートを交換し合って、個別作業でコメントを書く
必要なスキル	■ 多様な作業を一度に行うスキル（＝multi-modal）	■ 1つの作業を集中して行うスキル（＝single-modal）
指導や教師コントロール	■ 学習状況に関する多様な情報をいつでも閲覧可能（オンライン指導） ■ 机間指導と画面指導のバランスが必要（教室にいるのに画面指導だけだと罪悪感がある…）	■ 机間指導には限界があるため、提出後に個別に確認（オフライン指導） ■ 教室内での全体指導と机間指導のバランスが必要

今後に向けては、引き続き学びや思考のプロセスの共有と英語を使う機会の充実とのバランスをしっかり考えた授業を成立させていきたいと思っています。共有機能は生徒から好評ですが、コメントの活性化による共有にとどまらず、英語を書く力を伸ばすことから外れないように気をつけたいです。本研究の後半の授業実践では、生徒のライティングへの抵抗感も減らし、もっと書いてみたい気持ちにつなげていきたいです。

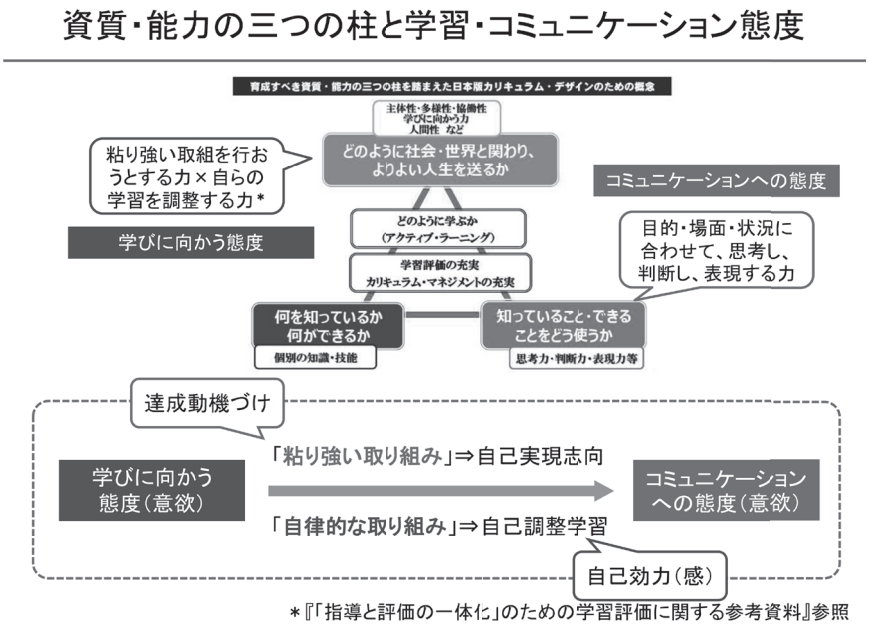
工藤先生：研究は2月まで続きますが、ここまでで見えてきたことをまとめましたので、ご覧ください（**資料3-5**）。

本来ICTは効率化や時間短縮につながるツールですが、ICTを活用すると学習プロセスなどの得られる情報が増えるため、増えた情報を処理するという新たな難しさも出てきます。全てのプロセスを把握すべきか、ICTを使いながら今後、考えていく必要があると思います。では長沼先生、まとめをお願いします。

長沼先生：今回の実践研究では、書くことへの抵抗感を下げ、書く意欲を高めることを狙い、従来型と端末型の授業を比較しました。ICT活用の工夫の前に、どちらの授業でも学びを促す工夫、書き手の学習方略の共有や自律性を高める工夫がされていました。また、教師の応答的、共感的なコメント、支援する言葉がけが上手で、ピアフィードバックでもコメントをしてほしいところに焦点があたっていたので、読んでもらえてよかったという気持ちが育ったのだと思います。教師や友だち、個人とのつながりをコミュニケーションで保障してあげることの重要性を改めて感じました。特定の相手に読んでもらいたいという個人的なコミュニケーション意欲が、課題への興味づけと合わさり、意欲をかきたてたことがキーになったと思います。

全体的に協働的な学びに基づいた思考の整理や個別最適化がうまくできていましたし、端末型では、個人的・協働的な思考を広げながら整理もできており、付加情報の提示や共有がしづらい従

資料3-6



来型では、思考を広げる工夫をしながら収束させていくことも同時に意識されていて、よかったです。

次の表は、育成すべき資質・能力の3つの柱と学習・コミュニケーション態度を示したものです（資料3-6）。

コミュニケーションへの態度は、目的・場面・状況に合わせて思考・判断をし、表現する力と関連していると考えられます。それに対して学びに向かう態度は、コミュニケーションへの態度を前提とした学びに向かう力、態度、意欲であり、そこには粘り強い取り組み、自律的な取り組みの2つの側面があります。よりよくしたいという自己実現思考等の達成動機を培う必要がある一方で、自ら学習を調整する力、自己効力感、使ってみてできた感覚をいかに醸成していくかが重要になります。

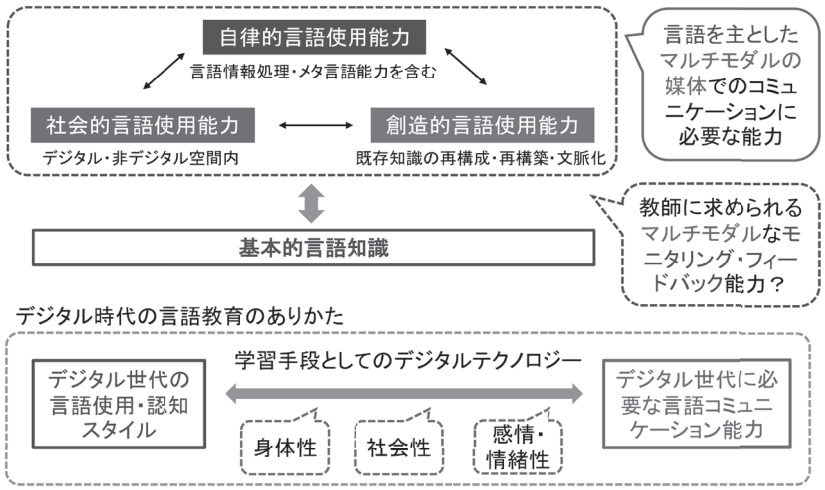
バトラー後藤　裕子先生の著書『デジタルで変わる子どもたち』（ちくま新書）では、このデジタル時代に必要な言語コミュニケーション能力は、言語を主としたマルチモーダルな媒体でのコミュニケーションと定義されています。しかし、教師がマルチモーダルな教室で、モニタリングやフィードバックを行うことは大変です。クラスとICTの活用状況を同時に見て、管理しながら、適切なフィードバックを個別最適に行うために、今後はマルチモーダルな能力を生かした教師になっていく必要がありそうです。また、学習手段としてのテクノロジーを使っていくにあたり、身体性、社会性、感情・情緒性が失われないよう、担保することも忘れずにいたいと思います（資料3-7）。

さらには、CEFR Companion Volumeに示されるように、インタラクティブなオンラインでのライティングは、メッセージの余剰性、正確な伝達と確認等のICT特有の能力が必要だと言われていますので、この部分への議論は今後さらに必要になると思います。以上です。

事務局：最後に本日のまとめを和泉先生からお願いいたします。

和泉先生：皆さんどうもありがとうございました。話

資料3-7



バトラー後藤（2021）『デジタルで変わる子どもたち―学習・言語能力の現在と未来』より改編

が多岐に及んだので、最後にまとめるのは難しいですが、ICTに関連して思うことは、生徒は新しいものが好きで、興味があるということです。ただ同時に、すぐに飽きる傾向がありますので、興味をもたせ続け、飽きないようにするために、どのような中身にし、どのような工夫をするのか、目的、目標、目指したい児童像・生徒像、つけたい力を考えた上で、手段としてICTをどう使っていくかが重要だということを改めて思いました。

All Englishに関しても似たようなことが言えると思います。All Englishの授業の重要性を主張する際、日本語が入ることは好ましくないと捉える意見があります。しかし、時々日本語を使用することで、場の雰囲気を和らげたり、生徒の気持ちをホッとさせたり、英語で多少曖昧だった部分をストンと落とし込めたりする上で、とても有効な手段となります。目指すべきは“All English”の授業ではなく、“English Rich”な授業をつくることと言えるでしょう。言語と内容ともに豊かな授業を創造していくことが大事です。これはICTの活用においても同じで、ICTをとにかくたくさん使えばいいのではなく、ICTに助けられてつくり上げる、English RichでCommunication Richな授業の創造が大事です。今後もその目的を見失わずに、ICTの使い方を考えていくべきでしょう。

教師は、AIロボットでは補えない役割を担っています。ICTが助けてくれることもたくさんありますが、“使われる”のではなく、“使っていく”立場でありたいと思います。教師はfacilitatorとして、様々な準備をする縁の下の力持ちであり、場の雰囲気づくりの立役者です。活動を導入し、つなぎ、流れを調整し、学習の意味づけをして、振り返りを促し、それをまたさらに次の学びへとつないでいく重要な存在です。その意味で、教師は「総合芸術家」「総合演出家」とも言えるでしょう。私が強調したいのは、究極的に授業は教師で成り立っているということです。ICTは手伝ってくれますが、あくまでもツールです。「生徒にとって最大の教育環境は、教師である」との言葉があります。これを最後のまとめの言葉として、私からのメッセージとしたいと思います。皆様、今日はどうもありがとうございました。

ARCLE理事からのメッセージ

シンポジウムを終えて

根岸 雅史（東京外国語大学）

ICTは加速度的に今日の教育現場に入り込んできています。その勢いは、私たちにICTとそもそもどう向き合うべきかを考える余裕さえ与えてくれません。そこで、今回のシンポジウムでは、いったん立ち止まって、ICTの学校での活用状況に関する調査結果を概観し、私たち英語教師はこの新しい状況にどう向き合っていくべきかを議論することにしました。英語教育とICTは相性がいいとよくいわれています。ICTは、教室に生の音声や動画を持ち込むことを容易にしてくれました。しかも、その完成度や手軽さは昔とは較べものになりません。音声や文字の提示やドリルなどもお手のものです。ICTのこうした側面は、確かに、教師の負担を大きく軽減してくれています。ただ、それと同時に、ICTのC、つまり、Communicationが英語教育では特に重要です。ICTを使って、英語の教室でいかに豊かなコミュニケーションを実現するか。次のステップ、教室内コミュニケーションの大きな変革を期待しています。

金森 強（文教大学）

個別最適教育の実践において、ICTの利用は欠かせないはずである。学習者の能力、学習スタイル、特性に応じた、多様な教材を提供することが可能となるからである。ICTを用いた授業の発表も増えてきており、その可能性に多くの期待を感じる。ただし、紹介される内容は、「知識・技能面」の指導に関するものが多く、テクノロジーの進化を紹介してくれてはいるが、学びの深化までは見られない場合もある。「思考・判断・表現の能力」や「協働的な学び」「主体的で対話的な学び」に働くICTの効果的な利用法の開発が、これからの課題と言えそうである。学習者の作成した成果物をタブレット等のスクリーン上で共有するだけでは、高次の思考能力育成、学力向上につながっているかどうかは分からない。そこに、学習者の思考を深める活動、手立てが必要であり、その役割を担えるのは人間教師に他ならない。今年も、このシンポジウムを通して、多くのことを考え、気づく機会になった。

和泉 伸一（上智大学）

最近の教育現場はICTの導入によって、情報と内容が豊富になり、かつテンポのよい授業展開が可能になってきた感があります。ICTの利点を最大限に活用しつつ、人と人との交流の大切さ、Communicationの重要性を忘れてはならないでしょう。“使わねばならぬ”といった強迫観念ではなく、4技能5領域のCommunicationの充実と活性化、そしてそこから起こる児童・生徒の学びのための“ツール”として、ICTを活用していっていただければと思います。その関連で、一昔前までは「学んでから使う」が当たり前でしたが、現代の子どもたちは「使いながら学ぶ」ということを自然と無理なく行っているようです。スマートフォンが典型的な例です。使っているうちに、また互いに教え合ったりしながら、いつの間にか使いこなすようになっています。ICTの導入とともに、英語教育でもこういった学びのあり方を参考にしていっていただければと思います。CLILの“Learn as you use, use as you learn.”（「学んでは使い、使いながら学ぶ」）の考え方と共通しているところです。

ARCLE理事からのメッセージ

シンポジウムを終えて　つづき

酒井 英樹（信州大学）

文部科学省から『教育の情報化ビジョン～21 世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～』が発表されたのが2011年です。10年が経過した現在、今回の調査報告が示すように、GIGAスクール構想の後押しもあり、教育現場の中でも日常的にICTを活用することが増えてきました。また、調査結果から、先生方も、情報を得たり話し合いをしたりといった協働的な学びのツールとして、認識するようになっていることが分かります。

ICTの活用によって、英語教育における言語活動をリアルなものにすることができるという利点を生かして、今後言語活動がより充実し、児童・生徒が英語でコミュニケーションする機会が一層増えることを期待します。俣野先生の実践研究発表では、俣野先生が、児童がICTを活用しながらどのように学んでいくのかということをよく観察し、受け入れ、指導に取り入れていく姿が印象に残りました。従来の指導方法を固持するのではなく、教師としての柔らかさをもち、教育観や言語観を更新しつつ、英語教育を実践していくことが重要であると感じました。

長沼 君主（東海大学）

ICTの活用によって、学習のプロセスの可視化や共有をしやすくなり、協働的な学びや思考の整理が促される可能性が示されたが、それらはICTの工夫による効果なのか、そもそもの学びの工夫による効果なのだろうか。今回の実践では書き手のコメントへの応答的かつ焦点的なピアフィードバックが工夫されていたが、これは従来型の教室でも可能な工夫であり、学びの工夫がないところにはICTの効果も減少するであろう。また、実践者から問題提起があったように、ICTを活用した授業において、コミュニケーションに取り組む意欲の向上や抵抗感（不安）の減少を促すためには、デジタルだからこそ感情や情緒性を失わないような、教師からの共感的な言葉がけや学習者間の支援的な関係性（風土）の構築が、今以上に重要となるだろう。CEFR Companion Volumeに6つめの領域として、オンラインでの言語使用上のやり取りに関するレベルごとのCAN-DOも示されており、ICTを活用したやり取りの特徴を踏まえた学びの工夫についても議論していきたい。

工藤 洋路（玉川大学）

ここ1、2年で1人1台端末の実現が進み、様々な形でICTが活用されている授業を見る機会が増えました。最初は効果が分からないところで、タブレットなどを使って指導を始めた先生方も多いと推察されます。今回のシンポジウムでは、スマートディスプレイのJamboardを使った「端末型」のクラスと、紙のワークシートを使った「従来型」のクラスの比較を通して、指導や学習の違いの検証結果を報告しました。新しいツールを使うことで、そのツールを使う場面以外においても、教師の支援の方法などが変化することが分かりました。今後の教師教育では、新しいツールを使った場合に授業全体の構成がどのように変わるのか、そして、ツールがある中で教師がどのような支援や働きかけをするべきなのか、といった点を考えていく必要があると感じました。児童・生徒は新しいものにはすぐに慣れてしまう一方で、飽きるのも早いため、ICTの活用を進めることが期待する能力やスキルの向上にどのようにつながるかを今後考えていきたいと思います。

参加者の声

「心に残った気づきや学び・これから取り組みたいこと」

～参加者アンケートから～

小学校教師

◎教室における最大の環境要因は教師であり、ICTのCommunicationの部分を最大限引き出せる教師であることが大切だと学ばせていただきました。

中学校教師・中高一貫校教師

◎活動の意味づけ、動機づけ、もっと生徒がワクワクしてやりたくなるような課題の設定をより意識して、授業を組み立てていかなくてはいけないと感じました。手段としてのICTのことを考えれば考えるほど、本質的なものが見えてきた気がしました。
◎今までICTを従来業務の効率化のために用いていたが、実践報告・実践研究を拝見・拝聴して、生徒の言語活動を豊かにするためにいかに活用していくかという視点で教材研究と授業計画を立てる必要があることに気づいた。
◎生徒一人ひとりにALTから動画でメッセージや質問を送ることや、発音の仕方を動画に撮って口元にも注目させることなど、日頃の授業での実践例がとても参考になりました。
◎振り返りシートでのICT利用。スプレッドシートの共同編集を使うことで仲間のコメントも読めるというのは目からウロコでした。自己調整、そして、協働学習にもつながることを期待して実践してみたいです。

高校教師

◎生徒へのフィードバック（writingへの返答など）をしっかり行い、ICT主体の授業ではなく、ICTの力を借りた人間同士のコミュニケーションのある授業づくりを意識したいです。
◎ICTを用いることで生徒は情報を多く集めることができ、意見をシェアしやすいと、よい点ばかりに目が向いていましたが、従来型と比べた結果などを見て、よいことばかりではないということに気づきました。ICTに振り回されず、ICTをツールとしてどう使うかを今一度しっかり考える必要があると思いました。
◎津久井先生のご発表の中で学生がICTを使うことで英語よりも日本語に多く触れることが起きるかもしれないが、英語を使う活動にどのように収束させていくかというお話が、大変参考になりました。ありがとうございました。

教育行政関係

◎ICTのCommunicationを意識することが重要。伸ばしたい資質・能力に合った活用法の研究が必要。

研究機関

◎大学生に英語を教える際、小・中・高での学び方や傾向を無視できないだろうと思い、受講しました。小・中・高で目指すコミュニケーションと大学生が目指すコミュニケーションはどこが似ていてどこが違うのかなど、コミュニケーションのための英語が今後どうなるのか、教師は何ができるのかを明確にしなければいけないと感じました。

学生

◎ICTを活用することによって、生徒の特性に合わせた学習が可能になること。また、生徒一人ひとりの取り組みの過程を見える化できること。
◎実践例をうかがって、子どもたちの発想によって教師自身も新たな発見があり、それをもとに試行錯誤しながら取り組んでいることが分かりました。テクノロジーに慣れ親しんだ子どもたちにとっては、タブレット学習の方がかえって取り組みやすく、英語への不安や嫌悪感を減らすことにつながると考えると、活用のしがいがあると感じました。しかし一方で、ICTは道具であって、個々の生徒に気を配り、様子を見ながら授業内容を考えていく最も重要な役割は、人間である教師が担うものだと、改めてその重大さを認識することができました。
◎ライティングもコミュニケーションであり、添削の際は、内容面へのアプローチが必要だということ。

民間企業

◎ICTを使うことで授業の可能性が広がっていくことが、改めてよく分かりました。また、ICTを使うことで効率化やできなかったことができるようになるが、一番大事なのは、それを子どもたちのためにどう使うかという根本的なところ。
◎ICTは何のために使うのか。生徒の学び支援であるので、それに必要なことは何かを改めて考えたい。生徒だけではなく、教師側の変化も必要であるということ。

ARCLE®

SYMPOSIUM REPORT **2022**

〈概 要〉

研究理事（五十音順）

和泉 伸一（上智大学）
金森 強（文教大学）
工藤 洋路（玉川大学）
酒井 英樹（信州大学）
長沼 君主（東海大学）
根岸 雅史（東京外国語大学）＊研究代表理事

研究員

加藤 由美子（ベネッセ教育総合研究所）
福本 優美子（ベネッセ教育総合研究所）
森下 みゆき（ベネッセ教育総合研究所）

正式名称　Action Research Center for Language Education（ARCLE/アークル）
＊ARCLEはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です。

事務局　〒206-8686　東京都多摩市落合1-34　ベネッセ教育総合研究所 内

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム報告書　2023年3月発行
企画・発行：Action Research Center for Language Education（ARCLE/アークル）
編集協力：水田真貴　デザイン：MONDO graphic

ARCS22

©Benesse Corporation. All Rights Reserved.